

ろくべん館だより Vol.42

## 『山中の道』

毎日自宅から仕事場へと通う道は、今年もすばらしい紅葉だった。舞うように降る落葉もまた、時間を忘れるほどに見惚れる。春の黄色い花々に始まり、芽吹き、新緑から盛夏の緑陰を過ぎて紅葉まで、この山中の道を通えることは幸いである。

村の中心から奥山へと通うこの道のところどころには石仏が置かれている。三十三所観音といわれる石仏は、文政年間に造られたものだそうだ。今からおよそ二百年前、この道はどんな道だっただろう。人がひとり、あるいは馬を引いて歩ける程の道だったと想像する。今でもさびしい道には違いないが、その比ではなかったであろう。山賊はどうかかわらないが、狐狸の出るくらいは容易に想像できる。

江戸時代までさかのぼるのは無理としても、今は亡き古老たちの話を思い出す。学校は分教場で三年間学ぶと、四年生から本校に通うことになる。晴れても降っても片道六キロほどの山道を、子供たちは朝夕歩いて通った。足に履くのはワラ草履。草履は一日履けば踵やつま先がちぎれた。だから毎晩、父親やおじいさんの夜なべ仕事としてワラ草履づくりは欠かせなかった。

現在では一日に何台も車が行き来する道だが、今のように車が通れるように拡張されたのは六十年前のことである。道路が拡張工事された後、集落から村外に引っ越す家が相次いだそうで、「なあんだ、こりゃ。便利になって人が入って来るかと思えば、逆に引っ越し道路だナム」と話したものだと言っていた。今も昔も変わらず、ここにもストロー現象が起きていたわけだ。

時代は変わって、わが家の子供が中学生の時、昔の子供たちが通っていた山道からみれば、格段に歩きやすくなった道を通学していた折に、こんな経験をしたと話してくれた。この道では数は年々減っているものの、山の獣たちと遭遇することがある。ある日、遅刻しそうだった子供は自転車で朝の道を下った。途中、鹿の群が道を横断しているところに通りかかった。驚いた群は四方に散らばったが、その中の数頭は自転車の進むのと同じ方向に走った。期せずして子供の乗る自転車は、鹿とかなりのスピードで並走し、数十メートル走ったのち山中に消えて行った。鹿と共に風をきって走った経験は、今も至福のときとして記憶にしまわれているだろう。またある時は、道の真ん中に血だまりを見つけた。ギョッとして一瞬立ちすくみ、気がついてみるとそこかしこに獣の気配がする。すると突然、鹿の声が近くで聞こえた。それに続いて複数の鹿が鳴き声をあげた。血だまりは群の仲間のものであったのだろう。それを悼み哀しむ声をあげていたのだろうか。あるいは仲間に死をもたらした、人間を恨んでの咆哮だったのか。鹿の声に周りを囲まれて、「怖かった」と子供は言った。

そんな道を往き来する人々を今も昔も見守ってきたのが、三十三体の観音様なのだ。ひ

とは自然の恵みに感謝するとともに、道中の安全を願ってきた。時に、道には危険がつきものなのだ。春先には特に落石が多い。大雨が降れば崖から水が流れ落ち、土砂や岩石を押し出す。大風が吹けば木の葉や枝を散らし、たまには倒木が道をふさぐ。大雪が降れば、急斜面では雪崩を起こし、雪の重みで樹木はしなう。

この道の一番の難所には「役行者（えんのぎょうじゃ）」の石像が祀られている。大きな岩がゴロゴロと落ちてくる崖で、昔から道をつくるのに苦心した場所だと聞いた。今は頑丈なフェンスがそれを防いでいる。以前は崖の上のくぼみに鎮座していた「役行者」だが、新たに法面の吹付工事がされた時から、道の反対側の小山の上に移された。これまで高いところにいた行者の像が、間近で見られるようになった。修験道の祖といわれ、まさに険阻な道を見守り続けたこの行者に、朝夕、通勤の車の中から挨拶をすることになっている。道中の無事を願う気持ちもあるが、それと同時に自分に注意を喚起する意味もこめてである。いつも変わらず、渋い顔で見送り出迎えてくれる。

数カ月前のことだった。この行者の像のすぐ近くで大きな車に出くわした。道幅いっぱいいっぱい的車体が向こうからやって来る。大きなクレーン車だった。山側の崖とガードレールに挟まれて、車体をこすりながら運転手も苦勞していた。私も面食らったが、役行者もさぞかし目を丸くしたことだろう。この道をこんな無理が通ることになるとは・・・

文政年間に、この道を通る二つの集落の住民が主となって寄進し、三十三体もの観音像を建てたという。それにはそれなりの理由があつてのこと。ひょっとすれば、いくつかの悲劇を経験してのことかもしれない。落石で命を落とした人がいたという話も聞いたことがある。さて、今後のことだが、資材や機材を運ぶ大型車、工事用車両、工事関係者を乗せた車などがこの道を行き交うようになった時、この道の安全はどこまで守られるであろうか。美しい景色と危険が隣り合わせのこの道に、二百年の間たたずんできた観音様や行者様はどうみることか。この道の無事を願うばかりである。